環境省の当面の目標は5年後に100羽、繁殖個体数にして100羽に殖やすことが目標です。今の状況ではちょっと来年100羽は難しいのですが、2024年までに中央アルプスに100羽を復活させることは、もうほぼ実現できそうな状況になってきました。

この事業の当面の目標は現在の御嶽山に相当する集団を復活させようというのが狙いですが、中央アルプスのライチョウ復活の最終目標は人の手を借りなくても集団が維持できる200羽まで殖やすことが最終目標というふうに考えています。

200羽まで殖やすことができたら、もう中央アルプスに登ったら普通にライチョウが見られる状態になるというふうに考えております。そのためには、環境省だけでなく、長野県、それから地元の市町村、それから登山者等、多くの方の協力を得ることで実現できると思っております。今後ともよろしくお願いいたします。

○座長（有山　義昭）　中村先生、ありがとうございました。

大きな拍手をお願いいたします。（拍手）

私も3年前から関わっており、今は20分にまとめてお話しいただきましたけれども、現地では様々なドラマがあったと推測しております。中村先生から捕食者対策の示唆もいただきましたので、環境省としても中央アルプスの個体群復活に関しては継続して取り組んでまいりたいと思いますので、どうぞよろしくお願いします。

先生、どうもありがとうございました。

4「ライチョウ・ハイポーターとして支えた人々」

仁田　晃司（環境省中部山岳国立公園管理事務所）

○座長（有山　義昭）　それでは、続きまして、ちょっと観点を変えまして、今までは立山と南アルプス、中央アルプスでライチョウの状況のお話をさせていただきましたけれども、次は環境省の仁田のほうから「ライチョウ・ハイポーターとして支えた人々」について説明します。

実際に環境省のほうでは第2期の事業計画をつくっておりますけれども、その中に人材育成とか人材という面での記載をしております。実際に今後の希少種保全に関しても人の部分が絶滅危惧種になっているような事業もございますけれども、そういったハイポーターとして保全に関わっていただいている方を中心に仁田のほうから紹介をいたします。

それでは、よろしくお願いします。

○仁田　晃司　初めまして、環境省中部山岳国立公園管理事務所、仁田と申します。

御承知かと思いますが、当事務所では乗鞍岳を含めた国立公園の保全管理及び利用について管理している事務所となります。

私の役割は、6月下旬から乗鞍岳で採取したクロウスゴ等々を中央アルプスに運ぶことを毎週やりながら、動物園からヘリコプターを飛ばして中央アルプスに野生復帰させるというヘリコプターの最終的な運航責任者をやっておりました。

私の説明の中で個人名を出させていただきます。個人名・住所・電話番号とかが、顔写真と一致する場面は一切ありませんので、AさんBさんという表現よりも個人名を出しながらお話させていただいたほうがより伝わりやすいかなあという結論に基づいての発表となります。1つ番組で申し上げますと、NHKの「プロジェクトX」なんかをイメージしていただければありがたいと思います。

幾つかの保護増殖事業に関わり、減ってしまった希少種を殖やしていくという取り組みの中で、私が過去関わってきたアホウドリ、アカガシラカラスバト、オガサワラオオコウモリ、オガサワラシジミなど、南の島の関わりが多く、特にアホウドリについては、3年間、鳥島という大海の孤島に通いながら専門家のお力添えもあり右肩上がりで鳥島個体群５千羽を超える成果に携わりました。

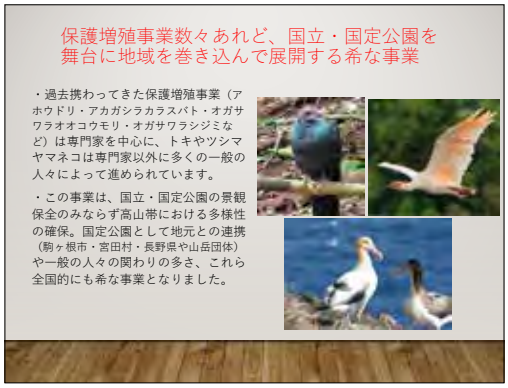
その中で、当省におけるライチョウ保護増殖事業というものが十数年前に始まったのですけれども、何故この時期にライチョウをやるのかという思いとともに、途中、富士山に2年間行っていたとき以外は、つかず離れずライチョウとの関わりがあったところです。

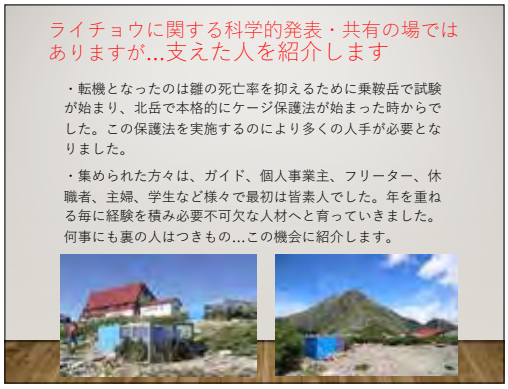
そして、国立公園の乗鞍岳、南アルプス北岳でこの事業が具体的に進んでいきました。これらに取り組みは今までになかった取り組みになろうかと思います。

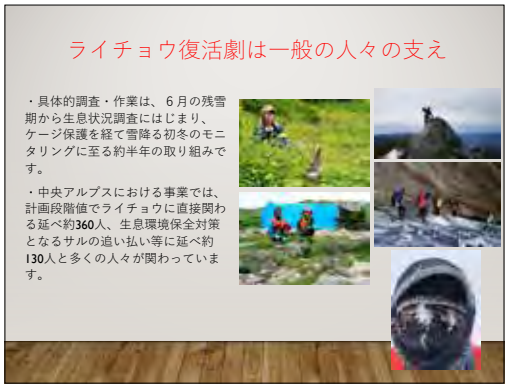
特に中央アルプスでの取り組みというのは、過去にライチョウが暮らしていたけれども絶滅してしまった、それを元に戻していこうということについては、なかなかまれな例として、かつ中央アルプスも県立自然公園から国定公園に格上げになったこともあって、地

元との連携が今後は大事になってくるという部分もございまして事業が進んでいきました。

私は科学者でも研究者でもありません。一行政マンですけれども、その中で転機となったのは、乗鞍岳で試験を始め、北岳で実質的にライチョウの数を増やそうということで取り組まれたケージ保護法であります。これについては、研究者、行政関係者をだけでは到底進められるはずもなく、これら業務を発注をしながら、そこに多くの一般の人に関わっていただかないと事業が相成り立たなくなってきたというところから1つの起点が生まれてまいります。







ここに集められた方々というのは、ガイドであったり個人事業主であったり、フリーター、求職者、主婦、学生など、様々な方が顔を連ねました。最初に乗鞍岳で始まったときは、みんな素人でした。中村先生にいろんな場面で御指導いただきながら、かつ怒られながら、この事業というものは進んでいきました。

これらの多くの面々の方々は、年を重ねるごとに経験を積み、必要不可欠な人材へと育っていきました。

何でもそうですけれども、裏のこと、表に出ないという部分が十分ある中で、このような場を設けさせていただいた本当にありがたく思うところです。

聞き慣れない言葉、ハイポーターという言葉を今回は使わせていただきました。

私がこれらの原稿を作って、職場の山仲間にタイトルはどうしたらいいかということで投げかけさせていただきました。そうしたらハイポーターという答えが返ってきました。

ハイポーターというのは、ヒマラヤ登山における山案内、食料の運搬など、これらに従事すること以上の部分として、ルート工作やベースキャンプ地の設営、登山隊を肉体的な面でもサポートする、場合によっては高度順化の手助けもするというような、日本語で言いますと高度技術者というような言葉になるのでしょうか。ライチョウ事業の中にそのような定義というものはありませんけれども、あえてハイポーターという名前のタイトルを掲げさせていただきました。

それらの仲間について紹介してまいりたいと思います。

ライチョウ復活劇には一般の人たちの支えがあります。

特に、6月の残雪期から始まる生息状況調査に始まり、ケージ保護法を経て雪の降る初冬のモニタリングに至る約半年間の取り組みとなりました。

中央アルプスにおける事業では、計画段階の数値ですけれども、ライチョウに直接関わる方々の延べ人数は360名、生息環境保全対策となる猿の追い払いなどに関わる方が130名と、多くの人々に関わっていただきました。

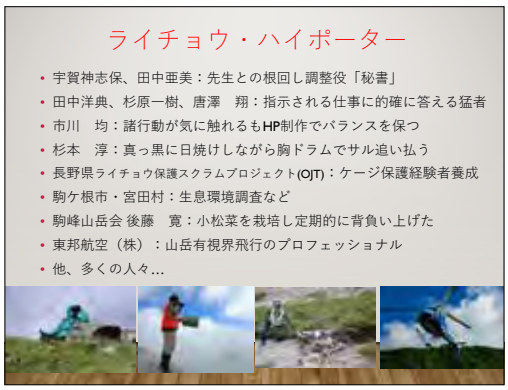
これが保護増殖事業の中で特に多いかというと、そういうわけでもなくて、やはりツシマヤマネコとかトキ、これらはボランティアも含めて多くの一般の人たちが関わっていますが、高山帯における一般の方の関わりという部分では非常にまれなケースだと思います。

写真左の1列の写真は、ライチョウをケージから放して餌を食べさせる、またはひなの体温が低くなったときに抱雛する等の場面を遠くから見守る様子です。

右上のとがった岩の上で何かを持っている人間は、これはラジカセを持ちながら雄ライチョウの鳴き声拡声させおびき寄せるということをやっている姿です。

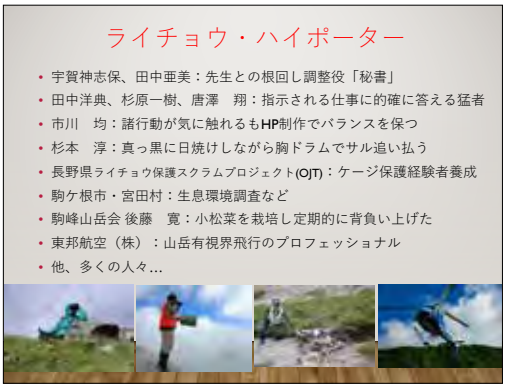
右下の2枚、これは去年の伊那前岳の稜線から足跡を探すと調査をやっているところです。

こんな作業をしていると、右下のよく分からない写真、結局、顔には霜もついて誰だか分からないような、こんな多くの気象条件を直接体に触れながら一般の方々に関わっていただいております。



ライチョウのハイポーターの宇賀神志保さん、田中亜美さん、先生との根回し調整役ということで、彼女たちがいないと、私たちと先生との間で意見の食い違いだとか多くの考え方の違いが生じたときに、彼女たちに今の先生の雰囲気だとか、こんなことはどうだろうねということを彼女たちにお話しして、要は圧縮材となって、私どもとの調整に携わっていただいた、まさに秘書と言われる人たちです。これらの表現というのは私の一個人の表現ではありますが、雰囲気を分かっていただければと思います。

田中洋典、杉原一樹、唐澤翔、これらの方々は、指示された仕事に顔色を変えることなく、どのような気象条件でも、どのような場面でも的確に応えて



くれる猛者です。

市川均さん、諸行動が先生の気に触れるもホームページ制作などでバランスを保つ、これはどういう意味かというと、先生の意に反する行動と共に先生が怒る、こんな場面を一番多く抱えている方ですけれども、ホームページをつくりながら何となく現場にも来ていただき、なんと微妙な雰囲気を持った方です。

杉本淳さんは、この後で登壇するのですけれども、彼だけ顔と名前が一致してしまうことは御勘弁いただきたいと思います。

帽子もかぶらずに真っ黒に日焼けしながら胸ドラムで猿を追い払うという、実際にどんなことをやるのですかと言ったら科学的な答えが返ってくるかと思いましたら、胸をたたきながら実際にこうやってやるのですよということで、この後で具体的な話があろうかと思います。

長野県ライチョウ保護スクラムプロジェクト、これはOJT、現場でのケージ保護経験者の養成講座、こんな方の関わりです。

駒ケ根市、宮田村は、生息環境調査などに注力した対応をしていただいています。

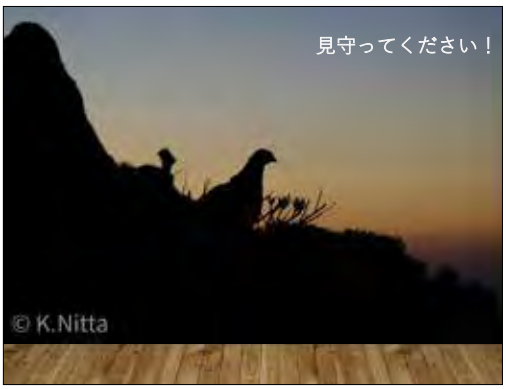
駒峰山学会の後藤寛さん、下界でコマツナを栽培し、定期的に背負い上げてくれております。去年はコマツナの食べ残しを私が背負い下ろしていたのですけれども、今年は多分後藤さんが下ろしてくれたのかなと、改めて感謝の気持ちでいっぱいでございます。

最後に、東邦航空株式会社、これは山岳有視界飛行のプロフェッショナルということで、私もヘリコプターに関わる部分をもう十数年やっているのですけれども、まさに今年の空輸は神業でした。最終的に決断をしたのは私ですけれども、経験値を考慮しパイロット、整備士を指定してのフライトで、彼らというものは、3年間同じ人たちがライチョウの空輸に携わったことで今日があるというふうに思っております。

多くは名前を挙げることはできません。多くの方々の関わりがありまして中央アルプスにおけるライチョウ復活劇というものありました。

改めて読み上げます。

中央アルプスにおけるライチョウ復活劇は、専門家の強い意志とハイポーターが積み上げてきた結果だと思っております。



朝のライチョウの風景を撮影した1枚です。

中央アルプスでもこのようなライチョウに関わる写真がより多く撮れることを祈りながら、私のお話を終わらせていただきます。

ありがとうございました。(拍手)

○座長（有山　義昭）　ありがとうございました。

この会場におられるライチョウに関してのハイポーターの方にいろんな立場で御理解、御協力いただきまして事業が進んでいることは、私からも改めて感謝申し上げたいと思います。

いま一度、仁田と会場にいらっしゃるハイポーターの皆様を含めて拍手をしたいと思います。どうぞよろしくお願いします。ありがとうございます。(拍手)

5「ライチョウへの被害防止を目的とした中央アルプス駒ヶ岳高山帯におけるニホンザルの追い払いの試み」

杉本　淳（株式会社公害技術センター環境部建設コンサルタント課長）

○座長（有山　義昭）　それでは、続きまして、ハイポーターのお一人ということで紹介もいただきましたが、「ライチョウへの被害防